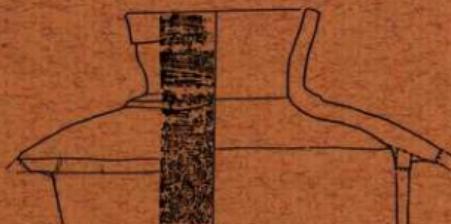


八尾市文化財調査報告 5

八尾市水道局送水管布設
工事に伴う埋蔵文化財調査

大竹遺跡



1980.3

八尾市教育委員会

はしがき

生駒山地西麓にひろがる扇状地は河内における古代文化発祥の地として長く古い歴史を育んできた土地であります。

このたび八尾市水道局によって上水道拡充整備事業が行われることとなった大竹地区もまたよく発達した扇状台地上に栄えた集落で、古代から現代に至るまで連續とつづいてきた由緒深い土地であります。

この上水道管路設計調査ルート沿いには史跡「心合寺山古墳」、心合寺跡、大阪府史跡「鏡塚古墳」が連なり埋蔵文化財保護上憂慮されるところが大ありました。そこで当教育委員会においては計画ルートに対し事前発掘調査を実施し、工事の可否について慎重を期した次第であります。

大竹地区は本市域における古墳時代前期～中期にかけての大形前方後円墳がまとまって群を形成している唯一の地域であります。肥沃な河内平野の湿润地を早くから開拓し、中央政界での活躍も伝えられている三野県主一族が、ここを代々の壘城とし、築造してきた古墳群と考えられているものであります。

発掘調査の結果は工事の施行に支障のないものであります。尚一層の注意を払うべく工事には終始立会調査を統け精密な記録をとりました。幸いにも事前発掘調査ならびに立会調査とも埋蔵文化財保存上の損失はなかったものの、この調査記録が将来の郷土史研究や各種土木工事計画の資料となり、また文化財保護の一助となることを願ってここに報告書としてまとめました。

本調査に当たり八尾市水道局の理解ある御協力に感謝するとともに調査関係各位に厚くお礼申しあげると共に今後の協力ををおねがいする次第であります。

昭和55年8月

八尾市教育委員会
教育長　坂本正一

例 言

1. 本冊子は八尾市水道局の昭和54年度事業、4拡配第66号配水管布設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査に要した諸経費（7,460,000円）は、すべて八尾市水道局が負担した。
3. 調査は八尾市教育委員会山本昭を担当者とし、昭和54年6月1日から10月31日までの間実施した。
現地調査は山本昭の指示で調査員黒川富久雄、原田昌則、高木真光が当った。
調査期間中、大阪府教育委員会文化財保護課、八尾市水道局担当職員の指導と協力を得、作業については御花田建設の労を煩わした。
4. 出土遺物の整理は原田昌則を中心黒川富久雄、高木真光、中谷暁子、中谷聖子がこれを授けた。
5. 報文および図は原田昌則が担当し、黒川富久雄、高木真光が協力し、山本昭がまとめた。

目 次

はしがき

例 言

目 次

I	調査に至る経過	1
I	遺跡の位置と環境	3
I	調査方法	5
IV	調 査	5
1.	A 地区概要	5
2.	A 地区遺物	14
3.	B 地区概要	24
V	ま と め	25

図 版

挿図目次

第 1 図 大竹地区周辺遺跡分布図	2
第 2 図 OT-1 平断面図	5
第 3 図 OT-2 平断面図	6
第 4 図 井戸遺構実測図	7
第 5 図 OT-3 平断面図	8
第 6 図 OT-3 出土壺棺実測図	8
第 7 図 OT-4 平断面図	9
第 8 図 OT-5 断面図	9
第 9 図 OT-6 断面図	10
第 10 図 OT-7 断面図	10
第 11 図 OT-11 断面図	11
第 12 図 OT-12 断面図	11
第 13 図 OT-13 平断面図	12
第 14 図 OT-14 断面図	12
第 15 図 OT-15 断面図	13
第 16 図 OT-16 断面図	13
第 17 図 弥生式上器	15
第 18 図 円筒埴輪	16
第 19 図 円筒埴輪・形象埴輪	17
第 20 図 円筒埴輪・須恵器	19
第 21 図 須恵器・土師器	21
第 22 図 土師質皿・瓦器・陶器	23

図版目次

図版 1 調査位置図
図版 2 A 地区トレンチ配置図
図版 3 OT-2 トレンチ(東から)・井戸遺構
図版 4 OT-8 トレンチ(東から)・土師質皿出土状況
図版 5 OT-13 トレンチ(西から)・池状遺構(南から)
図版 6 円筒埴輪・形象埴輪片・蓋形埴輪
図版 7 弥生式土器・土師質土器・ふいご羽口・壺棺

I 調査に至る経過

昭和54年、八尾市水道局は大竹の花岡池に上水用貯水槽を建設し八尾市北部一帯の給水に備える事業に着手した。当地域には前期古墳の「西の山、花岡山（消滅）、向山」の前方後円墳の所在は周知されていたが、その他の埋蔵文化財については確かな資料もなく不明であった。

花岡池の貯水槽工事が半ばを過ぎた頃、鎌倉時代を中心とする遺物包含層が発見され、急速大阪経済法科大学考古学研究室によって緊急調査が実施された。その後の導水管工事についても引き続き同研究によって調査が継続され、弥生時代後期の溝遺構および多量の土器の出土があった。ここに大竹、楽音寺地区における埋蔵文化財の実態が僅かながら擱めるようになつてきた。

水道局はつづいて第2次導水管布設工事計画を持ったが、そのルート沿いには史跡「心合寺山古墳」、「心合寺跡」、府史跡「鏡塚古墳」が連らなっているところから、ルートの設定、工法などについて八尾市教育委員会、大阪府教育委員会と再三にわたり協議を重ねた。

協議は計画ルートについて試掘調査を実施すること、埋蔵文化財が見られた場合はルート、工法について再協議を持つこととなった。

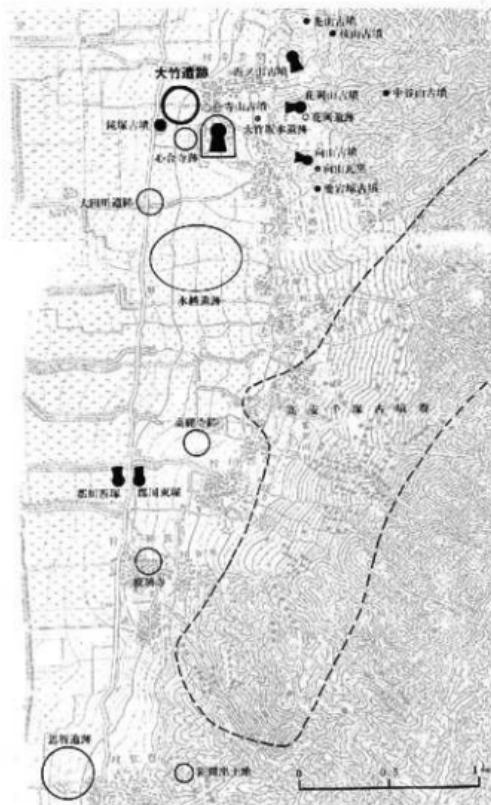
試掘調査はA地区においてはルート上に可能な限り多くの調査溝を設け調査を実施し、B地区（東高野街道ルート）については工事に並行して調査することとした。

A地区ルートに沿う心合寺山古墳は江戸時代初期の頃、かなり大がかりな周濠堤防の嵩上げ工事が行われたこと、またこの改修工事に際して心合寺跡の礎石が堤防基礎材として転用され、堂塔基壇も大きく削平され水田化したらしいことなどで、古墳の旧周濠基盤、寺域などについては充分な資料を持たなかつた。

ついで鏡塚古墳については時期は不明であるが古墳の原形が大きく変貌しており過去の記録、伝承も含めて古墳にかかる資料は極めて乏しいにもかかわらず円墳状の現況そのままの資料をもつて歴史的考察がなされてきた。

B地区については南端の太田川交叉点を中心とした周知の遺跡があり、若干

の遺物の出土が報じられてはいるが遺跡としての実態は明らかでない。また東高野街道は古い伝承を持つ平安時代以来の古道であるが、旧道の位置、規模などは全く顧みられていない。埋蔵文化財については地形および位置の上から太田川交叉点同様に包蔵が予想されるが交通量の多い舗装路で、このルートについては工事に並行して調査することとした。



第1図 大竹遺跡周辺遺跡分布図

II 遺跡の位置と環境

河内平野の東に位置する生駒山地は、標高 642 m をはかる生駒山を主峯とし、高安山、高尾山など数多くの山々で構成され、山頂稜線付近で大阪府と奈良県に区画されている。大阪府側に面した西麓は、風化され易い花崗岩で構成されており、出水時には多量の土砂が流下し、谷口付近に数多くの扇状地を形成してきた。

今回の調査区である大竹地区は、八尾市の北東部に位置し、生駒山地西斜面の谷を水源とした谷川により、向山、花岡山の両洪積世丘陵の間に形成された扇状地上に位置する地区である。また調査対象となった地区西部では、扇状地末端部が向山丘陵から派生した尾根状の地形と融合し、心合寺山古墳付近では西側へ約 2 m の比高差を持つ地形を造っている。それより西下方へは、ゆるやかに傾斜する丘陵性の地形が続き、末端部沿いには東高野街道が南北に通じている。このように生駒山地西麓地域の地形は変化にとんだ様相を呈し、各時代の遺跡はそれぞれの生活条件にそくした土地を選び今日に至ってきた。

まず縄文時代の遺跡としては、本遺跡の北方に隣接する東大阪市域に繩手^①、馬場川^②の両遺跡がある。繩手遺跡は、中期にまで遡る遺跡で、後期以降安定した集落を形成したことで知られる。馬場川遺跡は後期末葉から晩期前半にかけての遺跡で、各時期毎に他地域文化の強い影響を受けながらも馬場川独自の型式の土器を生み出したことで著名である。一方、八尾市域における縄文時代の遺跡には、本遺跡より南 3.5 km に位置する恩智遺跡がある。恩智遺跡は、昭和 16 年に縄文式土器の出土があって以来今日まで数度の発掘が実施され、前期～晩期の土器の出土が報せられている。他に、大竹、水越、山畑、郡川の各地区において石錐や石ヒ等の遺物が採集されている。このことは、山麓一帯にわたって縄文時代の遺跡が存在する可能性を示唆するものである。弥生時代初期の集落としては、恩智、鬼塚^③（東大阪市）、繩手（東大阪市）の各遺跡がある。

これらの遺跡は、すべて標高 15 ～ 20 m 前後の扇状地末端部に位置するもので、前面にひろがる低湿地が水稻農耕の適地として利用された結果と言えるものである。中期に入っては、西ノ辻、植附、山畑（以上東大阪市）の各遺跡が

増加する。その中でも特に、山畠遺跡は標高 80 m の扇状地基部に位置するもので、大東市の寺川遺跡や柏原市の高尾山遺跡と共に、生駒西麓における高地性ないしは丘陵性集落として注目すべき遺跡である。また、八尾市域の中期遺跡としては、部分的な資料ではあるが、水越遺跡がこの時期に遡るようである。⁽⁶⁾

後期の遺跡は、大竹坂本遺跡（八尾市）上六方寺遺跡⁽⁷⁾、鬼塚遺跡、櫛手遺跡、馬場川遺跡（以上東大阪市）のように扇状傾斜地に位置するものと北鳥池遺跡⁽⁸⁾（東大阪市）、水越遺跡（八尾市）のように平坦部に位置するものがあり、遺物の出土量も前、中期に比べて増加する傾向にある。古墳時代の遺跡としては、平野部においては、中田遺跡⁽⁹⁾、東弓削遺跡⁽¹⁰⁾、小阪合遺跡等楠根川沿いの遺跡を列挙することができるが、山麓地域で確認された遺跡は、複合遺跡である恩智遺跡と玉作との関連が考えられている水越遺跡にとどまる。古墳としては、山麓の独立丘陵上に西ノ山、花岡山、向山の前期古墳が築造され、この地区における強大な長期支配集団の存在を伺うことができる。中期には、中河内で最大の規模の前方後円墳である心合寺山古墳をはじめ、東高野街道沿いに位置する鏡塚古墳や、南 1.9 km に位置し、画像鏡の出土で知られた郡川の西塚古墳と、神獣鏡の出土した東塚古墳が存在する。後期には、大規模な横穴式石室で知られる愛宕塚古墳が大竹古墳群より少し南東寄りの海拔 80 m 付近に位置する。

そして愛宕塚古墳の築造を最後として古墳の立地は、尾根上に中心を持ち、高安千塚と呼ばれる大群集墳を形成する。大竹地区の歴史時代の遺跡としては、心合寺山古墳の西側に心合寺跡があり、現在までに奈良時代～室町時代に至る屋瓦や礎石等の出土が報告されている。また、地区東方の向山古墳南側の溜池沿いには、平安期の瓦窯跡が確認されている。⁽¹¹⁾

註

- (1) 櫛手遺跡調査会『櫛手遺跡 I』1971
- (2) 東大阪市教育委員会『馬場川遺跡調査概報 III』1975
- (3) 昭和 16 年 楠木勝俊氏によって繩文式土器の出土が確かめられた。
- (4) 大阪府文化財センター『大阪文化誌第 6 号』1976
- (5) 東大阪市教育委員会『鬼塚遺跡』1978
- (6) 枚岡市役所『枚岡市史』第三巻史料編 1966
- (7) 前掲書(註 6)
- (8) 前掲書(註 6)
- (9) 前掲書(註 4)
- (10) 東大阪市遺跡保護調査会『上六方寺遺跡』1975
- (11) 前掲書(註 6)
- (12) 中田遺跡調査センター『中田遺跡』1974
- (13) 八尾市教育委員会『東弓削遺跡』1976
- (14) 前掲書(註 4)
- (15) 前掲書(註 4)

III 調査方法

調査はA地区とB地区に分けて実施した。A地区は史跡「心合寺山古墳」と府史跡「鏡塚古墳」に北接する市道で東西約350mを測り道路東西両端の比高差は約9mで西に傾斜している。B地区は鏡塚の西側地点から太田川の交差点までの東高野街道で南北に440mを測る。A地区は道路の両側に隣接した埋設用地上にトレンチを設け、調査することにした。なお、トレンチは西から東に向かって16ヶ所設定し、OT-1～OT-16の名称を付した。一方B地区は水道管布設工事に並行して調査を実施した。調査は全線に対して掘削面の観察と壁面の実測を行った。

IV 調査

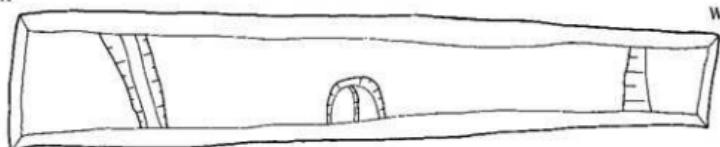
1. A地区概要

第1トレンチ(OT-1)

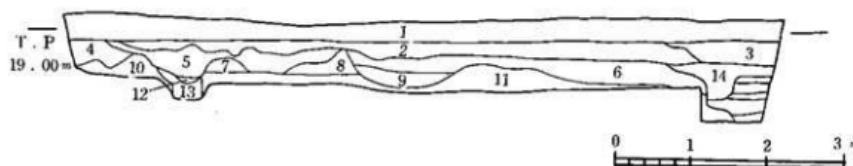
OT-1は、A地区の西端に設定したトレンチで、鏡塚古墳と近接する位置に当る。従って、同古墳に周濠が存在したと考えられる場合、この地点が周濠部に当ることから、これの有無を確認することを考慮して調査を行った。

E

W



南壁



1. 耕土 4. 灰褐色礫混粘質上層 7. 灰褐色砂質土層 10. 暗色砂粘質土層 13. 暗色中砂土層
2. 耕土(やや硬質) 5. 灰色礫混粘質土層 8. 灰色砂粘質土層 11. 灰青色礫混粘質土層 14. 暗褐色砂粘質土層
3. 淡灰色砂粘質土層 6. 淡灰色粘質土層 9. 灰褐色礫混粘質 12. 灰青色礫混土層

第2図 OT-1 平断面図

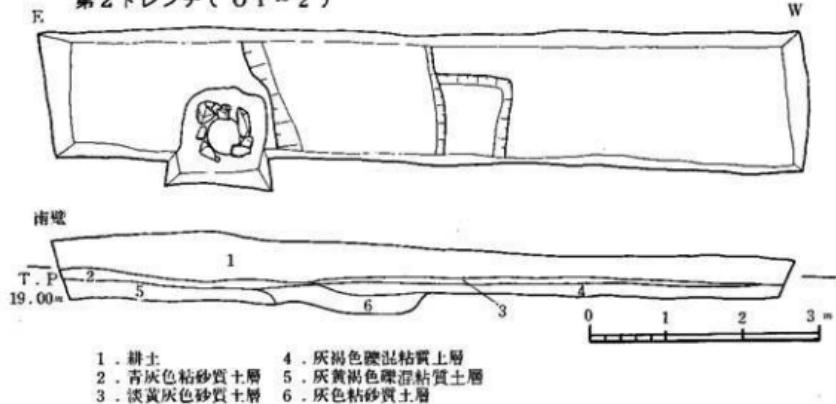
調査の結果、第2層の下部でビット5個、溝4条の第1遺構面が検出された。しかし、検出した溝遺構自体がその規模等で同質な性格を認められることや、ビットおよび溝内の土質がすべて粗い砂礫の混入であることから、遺構であるのか、耕作時における農耕具の痕跡かは確かめ得がたいものであった。また、この遺構面における遺物の出土は、土師器、須恵器、瓦器等であるが、細片で量的にも僅少であった。

第2遺構面は、灰青色礫混粘質土層を基盤とする遺構で、トレンチ西寄りおよび東寄りで南北に延びる溝遺構を、また中央部では、直径80cm・深さ20cmを測るビットが認められた。東寄りの溝は幅50cm・深さ80cmを測るものであるが、中央ビット同様に遺物の出土は皆無であった。

一方西寄りの溝遺構は、検出面で深さ45cmを測るものであるが、本来の切り込み線を断面で見ると淡灰色粘質土層上面からで、その深さは75cmを測る。溝内の遺物は瓦器碗等の細片が小量出土した。

次に鏡塚古墳の周濠の有無については、トレンチ全体を深さ1mまで掘り下げた段階では、濠跡を思わせる土層の存在は認められなかった。さらに部分的に1.6mまで掘り下げたが、濠跡に該当する土層の存在を認めるまでには至らなかった。

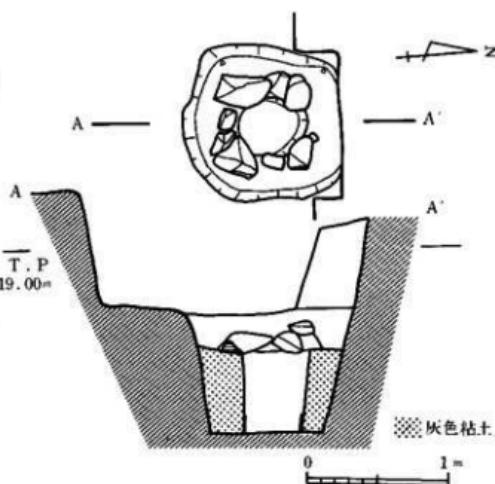
第2トレンチ(OT-2)



第3図 OT-2 平断面図

OT-2は、OT-1から東に40cmの畦を残して設定した。現状はOT-1同様水田である。層序は第1層耕土、第2層青灰色粘砂質土層、第3層淡黄灰色砂質土層、第4層灰褐色色疊混粘質土層、第5層灰黃褐色疊混粘質土層、第6層灰色粘砂質粘土層から構成され、第1層、第3層は、OT-1トレンチから連続する土層である。

遺構としては、トレンチの



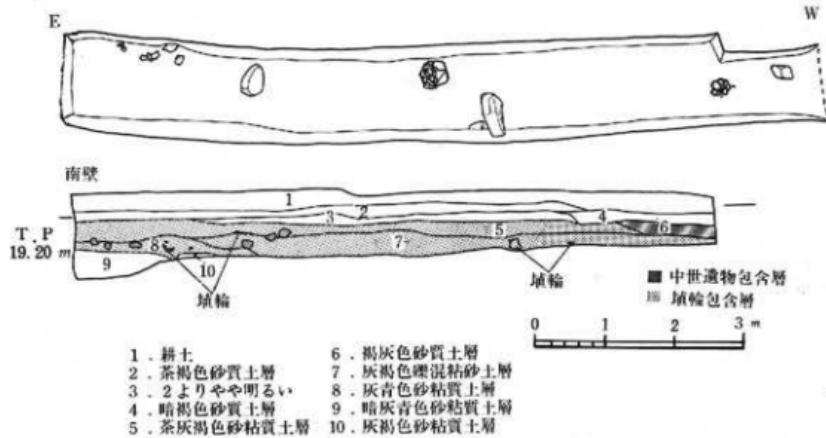
第4図 井戸遺構実測図

東部分で井戸遺構の検出をみた。この井戸は、上面直径50cm、下方では40cmの円形状を呈し、深さは60cmを測る。また、井戸底部に曲物片の一部が認められることから井戸の構造は、曲物を2段以上積み上げ、上半部は石を円形に廻らす形をとるものである。なお井戸底は、淡灰色砂質土層となっていて、この砂層からは調査中に多量の湧水がみられた。

遺物は、第1層、第2層で若干の出土を見たが、純然たる包含層として取り上げることのできた土層は、井戸上面の第5層、第6層であった。出土遺物は、井戸内部も含めて須恵器から中世遺物に至るまでの幅広い時期のものであり、大半の遺物は細片での検出にとどまつた。

第3トレンチ(OT-3)

OT-3は、今回の調査で最も多量の出土遺物を見たトレンチである。包含層は、埴輪を中心とした第5層、第7層、第8層と中世遺物を主体とする第6層に別けることができる。埴輪を包含する第5層は、OT-4の第4層へ連続



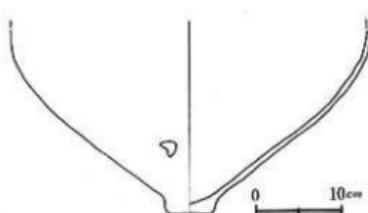
第5図 OT-3 平断面図

する層で、第4層自体が、トレンチ半ばで切れることができると認められるところから、埴輪を包含する層の東端を示すものと考えられる。また、このように埴輪を多量に包含する層がOT-5より東側のトレンチには認められないことから、埴輪包含層の性格も東方斜面からの流れ込みによるものではなく、或時期の整地による堆積と考えてよいものである。一方中世遺物を包含する第6層は、第5層を切り込んで堆積し、OT-2で検出した井戸遺構に関連する土層時期を示すものと思われる。遺構としては、

トレンチ中央部の第7層下部で壺棺が検出された。壺棺は、胴部から上部が欠損しており、底部は検出面より下層の灰褐色礫砂土層に達している。

壺は残存部で器高26cm・胴径5.1cmを測り、底部には、穿孔が2ヶ所認められる。内部には、壺の破片と扁平な小石を見るだけで、遺物は皆無

であった。その他の遺物としては、第6層下で土師質中皿の一括出土がある。皿は、大皿1枚を含めすべて裏面を上部に向け重なり合った形で出土していた。



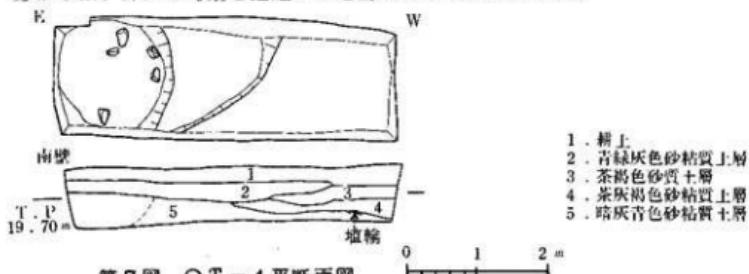
第6図 OT-3 出土壺棺

第4トレンチ(OT-4)

OT-3の東に設定したトレンチで、OT-3の埴輪包含層の広がりを追求することを主目的とした。調査の結果、第3層、第4層、(埴輪包含層)第5層ではOT-3と連続する層を認められたが、OT-8の東寄り部分で確認した灰青色粘質土層(埴輪包含層)は、連続性を欠くものであつた。

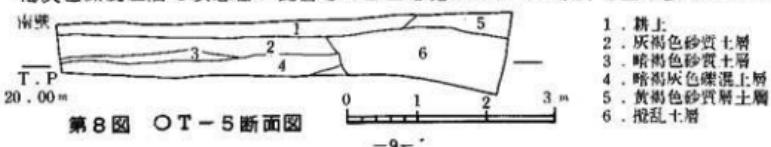
遺構としては、トレンチ東部分で井戸跡かと思われる円形の落ち込みを検出した。落ち込みは直径1.6m、深さ60cmで底には15cm前後の自然石5個が認められ、石の外側にタガの一部かと思われる竹材が部分的に残存していた。

これらから、この遺構を井戸とすると、樽を井筒として利用したものと考えられる。遺物は、第4層で埴輪片の出土を見るのみであり、井戸内および掘方からは、井戸の時期を推定する遺物は認められなかった。



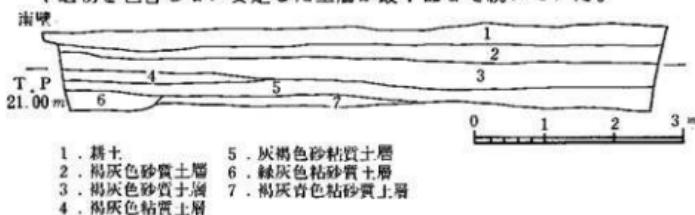
第5トレンチ(OT-5)

OT-5は、OT-3・4を設定した水田面より60cm高い地点で、現状は畠である。調査は、深さ80cmまで実施し、層序は基本的には4層を数えることができる。しかし、トレンチ東部分は、かつては池であったと推定されるものでその埋没に際する攪乱がみられる。遺物は、第2層で旧池に関連すると思われる土管が東西方向に数点ならんで遺存していた。上管は瓦質で長さ85cm、直径は一方が12.8cm、他方が7.7cmの砲弾形である。その他の遺物は、第4層の暗褐色疊混土層で須恵器、瓦器等の出土を見たがすべて細片で量も少なかった。



第6トレンチ(OT-6)

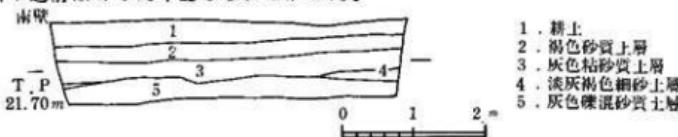
道路より南側に設定したトレンチである。調査は1mまで掘り下げたが、全く遺物を包含しない安定した土層が最下部まで続いていた。



第9図 OT-6断面図

第7トレンチ(OT-7)

道路より南でOT-6の東方上段に設定したトレンチで、現状は畠地である。層序は第1層耕土、第2層褐色砂質土層、第3層灰色粘砂質土層、第4層淡灰褐色細砂土層、第5層灰色礫混砂質土層から構成され、OT-6と同様に包含層や遺構はまったく認められなかった。



第10図 OT-7断面図

第8・9トレンチ(OT-8・9)

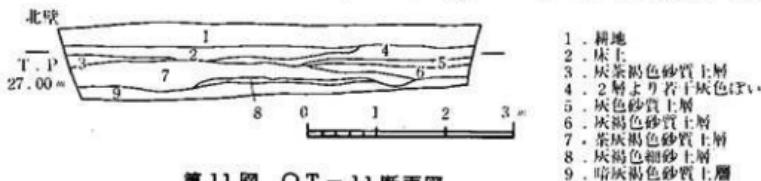
深さ1mまで調査を行ったが、上面より粘土層が続き、湧水量も著しいことから旧状は池であったと思われる。

第10トレンチ(OT-10)

調査中、トレンチ南壁面が湧水により著しく損傷をきたした為、断面観察に切り替え続行した。層序は上層より耕土・床土と続き、それ以下は不明瞭な灰色粘土で、最下層には植物遺体を含んでいた。このような情況からOT-10の地点も道路沿いに点在する灌漑用の池の性格を過去に果していたものとして考えられる。

第11トレンチ(OT-11)

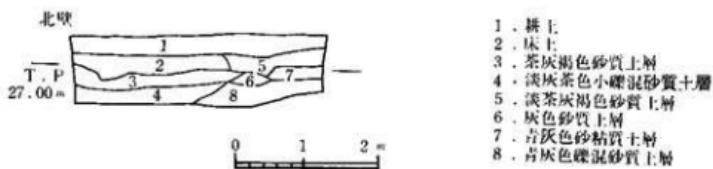
第2層以下は、かなり複雑な層序を呈するもので、特にトレンチ南半分は、石垣構築の際攪乱を受けている。遺物は耕土以下の各層にわたって出土をみたが、いずれも細片で磨耗の著しいものが大半をしめた。その中に布目のある屋瓦片が数点含まれていた。このことは、OT-11が心合寺山古墳の西側に旧存した心合寺跡(奈良時代～室町時代)の北に接するからであろうと思われる。



第11図 OT-11断面図

第12トレンチ(OT-12)

層序は基本的には、第1層耕土・第2層床土・第3層茶灰褐色砂質土層・第4層淡灰茶色小礫混砂質土層の4層から構成される。トレンチ東寄りには表土下20cmの地点に肥溜樽が埋められており、これに伴う攪乱部が認められる。遺物としては、第8層で埴輪片の出土を見たが、全体に磨耗を受け、遺物自体も時期幅を認めることから、後世の混入と考えられるものであった。



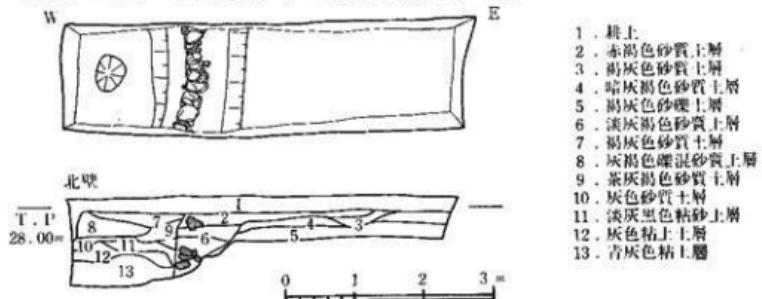
第12図 OT-12断面図

第13トレンチ(OT-13)

トレンチ西寄部分に池状の遺構が検出されている為、全体の層序もトレンチのほぼ中央で東西に2分される。西側は、池状遺構に関連する石組と掘方があり、石組から垂直に立ち上がる土層を境として、西側は池特有の粘土土層の

堆積を見ることがある。一方東側は、第8層が第4層に切り込んだ形をとる部分がみられるが、全体には比較的安定した土層である。

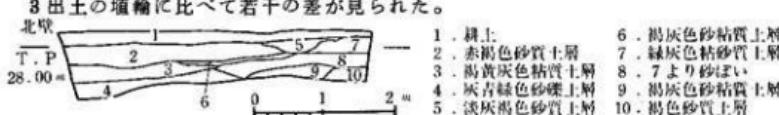
このトレンチ西寄部分で検出した池状遺構は、南北方向に連なる石組遺構を伴うもので、検出時の石組残存高は20cmであるが、断面に残る石や掘り方の痕跡から推定して本来の規模は、70cm位であったと思われる。石組を構成する石は、最下部で少し大きめの石を使用するが、2段目以上は15cm前後の小石を使用し、自然石の面を揃えた「野づら積」によるもので、石材は大半が花崗岩であった。また、調査の関係上、池状遺構の広がりについては確かめることができなかつたが、石垣の現状から見てゆるやかに内湾して広がるものと推定される。遺物は、耕土下で須恵器・瓦器・屋瓦等の破片の出土を見たにとどまり、第2層以下の各層および池内からの出土は皆無であった。



第13図 OT-13 平断面図

第14トレンチ(OT-14)

層序は、東方からの流れ込みにより堆積したと思われる土層により複雑な様相を呈している。遺物は、第2層、第8層で埴輪片の出土を見た。この埴輪片は、いずれも焼成が不良で色調に明黄褐色を呈するなどの特徴があつてOT-3出土の埴輪に比べて若干の差が見られた。



第14図 OT-14 断面図

第15トレンチ(OT-15)

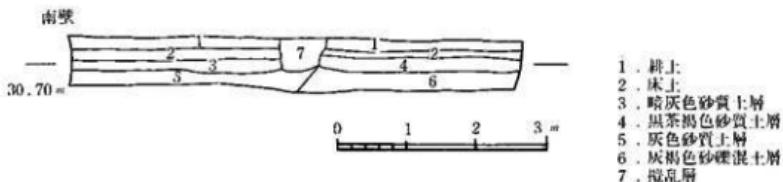
OT-15は、心合寺山古墳の西側で濠を成す新池の堤防の北側に位置する地点で、OT-14で埴輪片を確認したことから従来言われるよう、心合寺山古墳の濠の堤防上における埴輪の存在との関連を考える上で興味深い地点であった。全体に1mまで掘り下げ調査した結果、第1層耕土、第2層褐灰色砂質土層、第3層灰褐色砂粘質土層、第4層綠灰色粘土土層から成る土層の堆積を見るのみで当初、期待が持たれた埴輪を包含する土層も見られず、全体の出土遺物も僅少で、第1層などに近世の陶磁器片を検出したにとどまった。



第15図 OT-15断面図

第16トレンチ(OT-16)

A区の東端に設定したトレンチで、深さ80cmまでを調査した。層序は、トレンチ中央で攪乱部が見られるが、基本的には調査面まで6層で、第2層以下の土層が攪乱部をはさんで若干の差があることが指摘できる。遺物は第4層黒茶褐色砂質土層にみられ、量は僅少で、土師器・須恵器等の細片にとどまった。



第16図 OT-16断面図

2. A地区遺物

出土遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・埴輪・土師質土器・瓦器・屋瓦・中近世の陶磁器等の細片がみられた。調査地点が東から西へゆるやかに傾斜する地形であるため遺物は、ほとんどが流れ込みによる2次堆積である。

この中にあってOT-3にみられた整地によると推定される埴輪片の堆積および土師質皿群の遺存と壺棺は、本遺跡を考える上での重要な遺物であった。

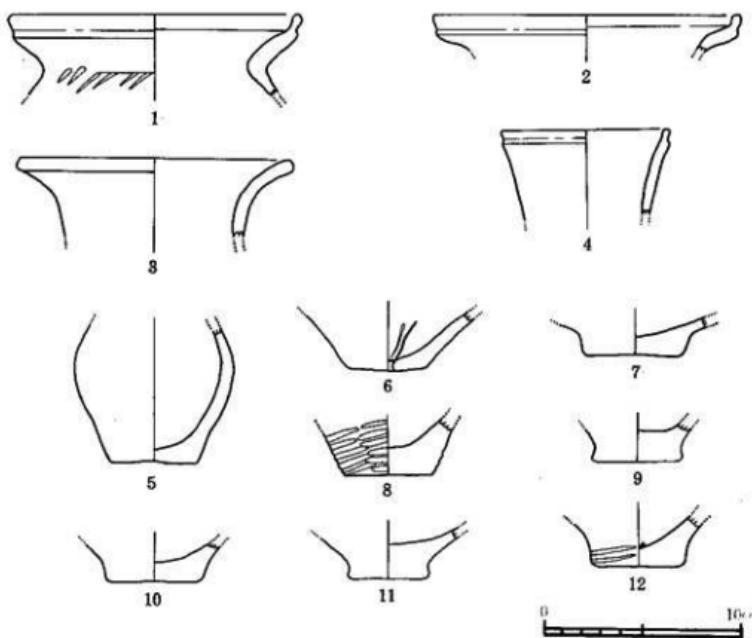
以下実測可能な遺物について時期・器種ごとに報告する。

弥生式土器（第17図 1～12）

弥生式土器は、各トレンチで普遍的に出土を見たが、細片で正確に図示し得るものは、OT-3の出土遺物に限られる。器種としては、甕の口縁部（1・2）、底部（8・12）、壺の口縁部（3・4）、底部（5・7・9・10・11）有孔鉢形土器（6）等があり、時期的には、ほとんどが畿内第V様式後半に編年されるものである。

(1・2)は、外反する口縁部が端部で角度を変えてゆるやかに内反しながら立ち上がり、口縁端部は、丸く終るもの(1)と平らな面を残して終るもの(2)がある。調整は口縁部内外面にヨコナデを施し、(1)の体部上面には左下がりのタタキ目を残す。胎土は両者とも細砂粒混じりで、焼成は良好である。(3)は、外反する口頸部をもち、口縁端部は丸味をもって終る。調整は器表が風化していくで確められないが、胎土には細砂粒混じりの粘土を使用し、焼成は不良で色調は赤褐色を呈する。(4)は、細頸壺の口頸部で、口縁部外面にはヨコナデによる凹線が一周する。調整は外面タテ方向、内面ヨコ方向のヘラ磨きを施す。胎土は微砂を含み、焼成は良好である。(5)は、小壺と推定されるもので、底部は小さく壅み、外面はヘラ磨き、内面はナデと一部にヘラ跡を残している。

焼成は良好、色調は茶褐色を呈する。(6)は、鉢の底部に小孔を穿ったもので、穿孔は焼成前に行われている。調整は内外面ともナデを行い、内面の一部にヘラ跡が見られる。胎土は多量の砂粒を含む。(7～12)は、甕・壺の底部で、(8・12)は、外面にタタキ目を残す。(9)は、内面に指頭圧痕、(10)



第17図 弥生式土器

は、外面底部に不規則な刺突文を残す。

埴輪（第18図、1～5）（第19図、6～19）（第20図、20～32）

OT-3、OT-4、OT-14の各トレンチから出土を見た。その中でも特にOT-3における出土は、中世時期の整地による2次堆積ではあるが、コンテナ4箱分におよぶ出土量であった。器形別にみると、円筒埴輪片が大半をしめ、ほかに朝顔形埴輪・蓋形埴輪等の細片が認められた。

円筒埴輪は、すべて細片化しており、全貌を知り得るものは存在せず、破片等から口縁径22cm前後、底径15cm前後が推定される。凸帯は、三段にめぐらすものが大半をしめるようで、断面形は合形状を呈し、突出度も小さいものである。透し孔は、確認できたものはすべて円形で、配置関係は明確ではないが、多く

の破片から推定し、最上段と最下段ではなく、2段目および3段目に穿たれていると推定される。

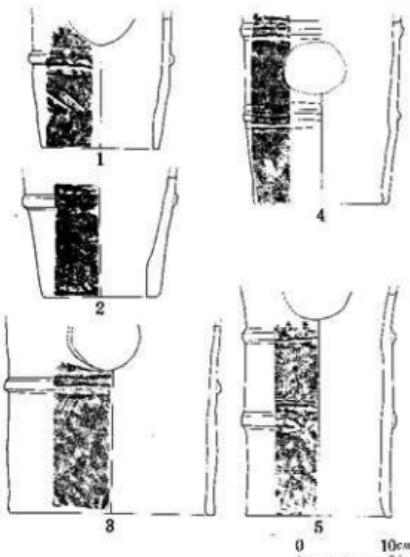
焼成は、須恵質(A)、須恵質に近い焼成(B)、土師質(C)、軟質の土師質(D)の4つに別けることができ、C・Dの埴輪で黒斑を有するものは、認められない。

(1)は、底径12.5cm・残存高14cmを測り、凸帯は断面台形状を呈す。調整は第2段に右傾ハケ、最下段は、ハケ調整後板状工具で右傾方向に押圧を加えるものである。

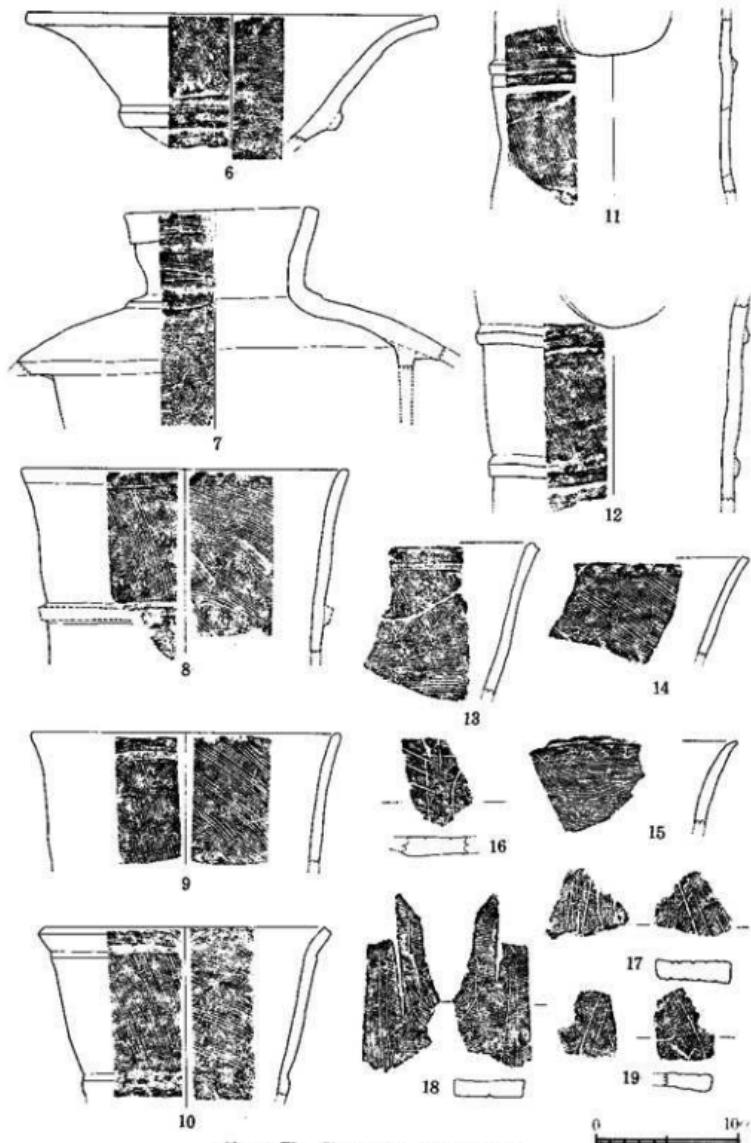
(2)は、底径12.6cm・残存高13cmを測り、凸帯は断面台形状を呈す。

調整は最下段でヘラケズリ痕を残し、全体に荒い仕上がりであり、底部内面は指による指圧痕が明瞭に見られる。(3)は、底径22cm・残存高20.5cmを測り、凸帯は断面台形状を呈す。調整は内外面に右側のハケを施し、端部はヨコナデを行う。(4)は、底径14.4cm・残存高19.9cmを測り、須恵質の焼成で灰青色を呈する。凸帯は断面台形状を呈し、突出度も小さい。調整は第2段ではやや右傾で、密度の細かいハケを施し、最下段は、タテハケを全体に遍らさず、部分的に施し、タテハケも末端部まで達していない。底部内面は指ナデによる調整で、末端部は薄く終る。(5)は、底径15.6cm・残存高24cmを測り、凸帯は断面台形状を呈し、突山は小さい。調整は、最下段ヨコハケを行なうが、一部には右傾のヘラ跡も認められる。第2段は、タテハケ後に密度の粗いB種ヨコハケを施す。底部内面は指による圧痕が見られ、末端部は薄く終る。

(6)は、口縁径29cmを測る朝顔形埴輪で、口縁部はくびれ部より斜め方向に立ち上がり、口縁上部で外方向に強く外反し、端部は平坦面をもって終るも



第18図 円筒埴輪



第19図 円筒埴輪・形象埴輪

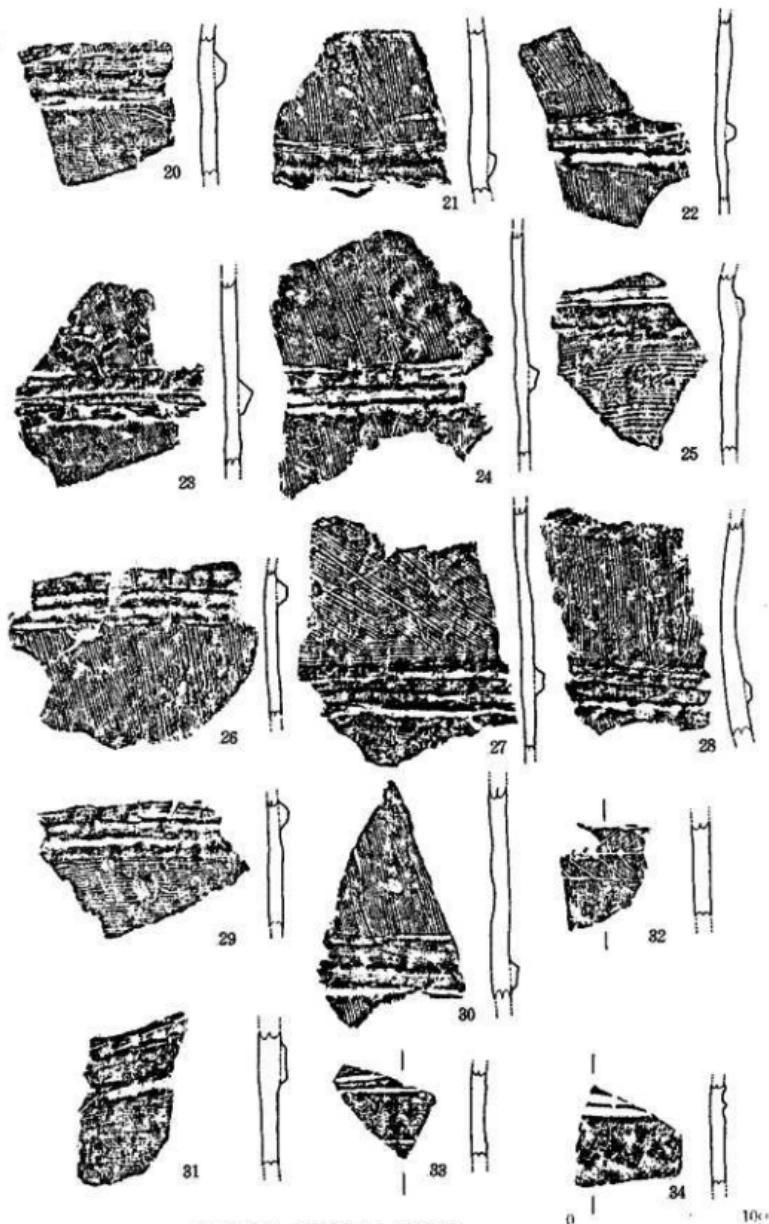
のである。凸帯は幅2cmを測り、突出も大きく断面は台形を呈す。調整は、外面凸帯より上段を右傾のタテハケとし、下段は上段とは密度の異なる左傾のタテハケを施す。内面は乱方向のヨコハケが全体に行われ、口縁部および凸帯は、ヨコナデ調整を行う。

(7)は、蓋形の埴輪で下部は大きく欠損しているが、上部は復原可能でほぼ完形を保っている。調整は、笠部外面は乱方向のハケ、円筒部外面はタテハケ後ヨコハケを行う。円筒部の端部および内面はナデを施し、頭部と笠部の周囲は幅2cmの粘土帯を貼りつけ、その上をナデている。また、笠部と台部の接合部内面は、比較的太めの粘土紐を接合部分に押えつけ、指先で放射状にひき延ばす為、接合面には指圧痕や爪痕が明瞭に残っている。胎土は、細かい砂粒を多量に含んでいる。

(8)は、口縁径23.1cm・残存高18cmを測り、凸帯は欠損している。調整は外面右側のハケを使用し、口縁部は、内外面とともに丁寧にヨコナデを行う。内面は大半が右傾のハケを使用しているが、一部には乱方向のハケも見られる。

(9)は、口縁径22cm・残存高9cmを測り、須恵質の焼成で灰色を呈する。調整は外面はタテ方向のハケ、内面は右傾のハケを施す。口縁部はヨコナデを行う。(10)は、口縁径20.8cm・残存高12cmを測り、凸帯は断面突出度の低い台形を呈す。調整は右傾のハケを口縁部まで施し、口縁下に横方向のナデを行う。内面は右傾のハケを使用し、凸帯部分内面は指頭圧痕を残す。

(11)は、残存高12.5cmを測り、須恵質の焼成で色調は赤灰色を呈す。調整は他出土の須恵質埴輪と類似する。(12)は、残存高14cmを測り、凸帯は断面台形状で突出も小さい。調整は外面に右傾のハケを施すが、全体の調整は荒く、内面は指先による圧痕と縱方向の指ナデが認められる。(13)円筒埴輪の口縁部で、内面調整は右傾のハケ、外面は、右傾ハケ後ヨコハケを行う。口縁部はヨコナデを行う。(14)も円筒埴輪の口縁部で、調整は内外面右傾のハケ、口縁部はヨコナデを行う。(15)は、内面に施されているヨコハケが、須恵器の調整際使用されるカキ目に類似し、外面もヘラケヅリを行い、焼成も堅敏で色調も明黄灰色を呈するなど、他の埴輪とはその作風で著しい異なりを見せるも



第20図 円筒埴輪・須恵器

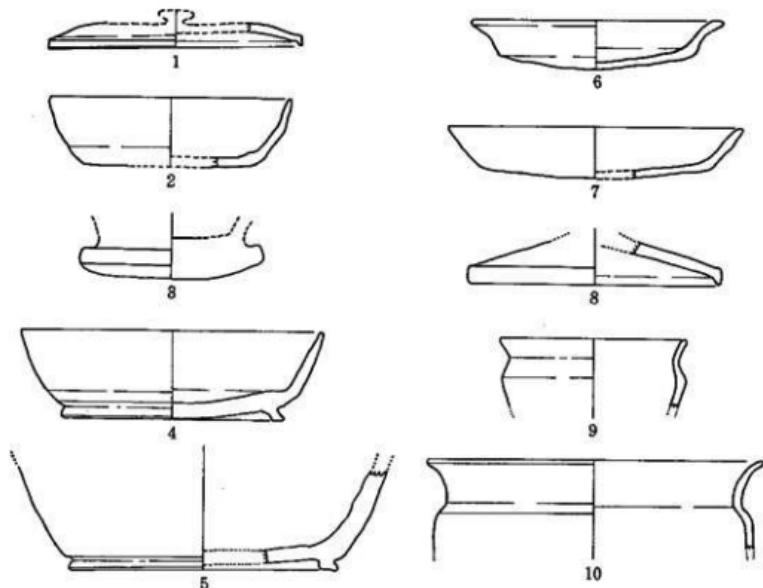
のである。また、それらと同質の埴輪片が全体の出土埴輪片の中に数点含まれ、その中に朝顔形埴輪のくびれ部分が認められることから、器形は朝顔形埴輪の口縁部と推定される。(16~19)は、形象埴輪の一部で、調整は、縱および横方向のハケを施した後、ヘラで沈線の文様を刻むもので、その規則性や器形は遺物が細片で検出された為不明である。

(16)は、厚さ 1.2 cm・幅 4.8 cmを測り、表面縦方向のハケにより整形された上に、ヘラで沈線を施す。(17)は、厚さ 1.2 cm・幅 5.8 cmを測り、両縁はヘラで切られる。調整は表面が左傾のハケ、裏面は右傾のハケを施し、表裏とも 5 本ずつの沈線を残す。(18)は、厚さ 1 cm・幅 4.9 cmを測り、両縁はヘラで切られる。調整は表面が左傾のハケ、裏面は右傾および縦方向のハケを施す。表裏とも同様な文様の沈線を描くが、中央の沈線は文様帶のものと異り、表裏で切り込みの長さに違いが認められる。(9)は、厚さ 1.1 cm・幅 3.8 cmで、右縁をヘラで切られる。調整は表面左傾、裏面右傾のハケを施し、表裏とも 2 本ずつの沈線を残す。(第20図 82)は、厚さ 0.8 cm・幅 5 cmで、表面に密なハケを施した後、縞杉文を描くもので、中央にならぶ剝突痕はヘラ先により、左方向から右方向への施文が考えられる。(20~31)は、すべて円筒埴輪の破片で、凸帯は断面台形状を呈するものが大半をしめるが、(28)のように断面三角形のものもみられる。調整は、右傾ハケ後にヨコハケを行う(20)や、凸帯の上下部分をヨコハケした後右傾のハケを施す(27)がみられるが、大半が(22・28・24・26・28・29・30)のように右傾のハケを施すものと、(25・29・31)のように横方向のハケを施すものとに別れる。焼成は、須恵質A(22)、須恵質に近い焼成B(24・28)、上師質C(20・21・23・25・26・27・29・30・31)、軟質の七師質D(26)の4種に大別することができる。

須恵器 (第20図 33・34) (第21図 1~5) 土師器 (第21図 5~10)
(33)は、上下の沈線の間に雑な波状文を描く。調整は、外面の一部で一度施文した上を再度ナデる為、沈線の肩に押しつぶされた部分が見られる。内面は、ナデにより平滑にされている。胎土は細砂粒を含み、焼成は良好堅緻で、色調は灰色である。(34)は、外面を丁寧にナデた後、均整のとれた波状文を描く。

調整は、内外面ともにナデを施す。胎土は精良粘土を使用し、焼成は良で淡灰色を呈する。

(1)は、偏平宝珠つまみのつく杯蓋で、天井部からゆるやかに内湾しながら口縁部に至り、口縁端部内面には、身を受けるかえりがつく。焼成は良好堅緻で、胎土は密である。(2)は、杯身で、口径 12.2cm・器高 8.4 cm を測り、口縁部は底部より斜方向に立ち上がり、端部を丸くおさめる。調整は内外面ともヨコナデで仕上げ、焼成は良好で淡灰色を呈し、胎土には細砂粒が混じる。(3)は、底部のみ残存する鉢で、9.8 cm を測る。底部は丸底に近い平底である。焼成が不良の為、全体に表面の剥離が著しい。(4)は、高台のつく杯身で、口縁径 15.8 cm・器高 4.2 cm を測る。調整は内外面ともに丁寧にナデを行い、胎土には、細石粒が混じる。焼成はややあまく、色調は淡灰色である。(5)は、高台直径 18.6 cm を測り、全体に器壁が厚く、器形自身の形状からも高台付の蓋と推



第21図 須恵器・土師器



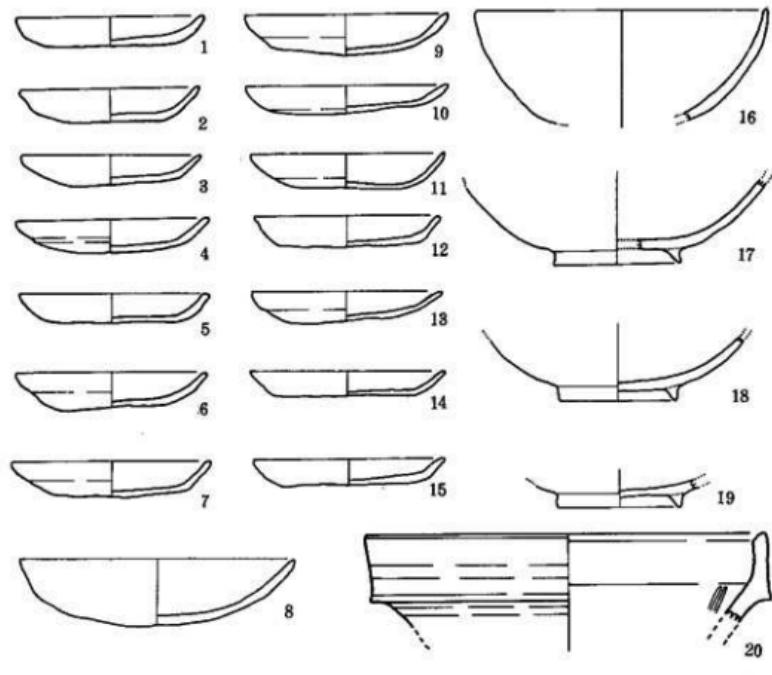
定されるものである。調整は高台部分外面と内面をナデ、外面はヘラケズリを行う。(6)は、土師皿で、体部中段より外方向に外反し、口縁端部を外に向かって丸く終る。調整は内面および口縁部はヨコナデを行い、外面底部は指頭圧痕を残す。(7)は、底部より斜め方向に立ち上がり、口縁端部は、丸味を帯びて終る。口縁部内外面は、ヨコナデ調整を施し、底部には指頭圧痕を残す。胎土は微砂を含み、焼成は良で赤褐色の色調を呈す。(8)は、上部が欠損する為詳細は判別し難いが、高杯の脚部と推定されるもので、調整は内外面ともにナデを施す。(9)は、口縁径 94 cm を測り、ゆるやかに外反する口縁部をもち、端部は丸く終る。調整は内外面ヨコナデを行う。(10)は、甕で、外反する口縁部をもち、口縁端部は丸味をもって終る。調整は、口縁部および胴部の内外面にヨコナデを行う。胎土は微砂を含むもので、焼成は良好である。

壺棺（第6図）（図版7 18）

胴部の立ち上がり方向から推定して壺と考えられるもので、焼成後の穿孔が底部より少し上部で2ヶ所見られ、ほかに穿孔途中のものが1ヶ所見られる。調整は外面をヘラで磨き、内面はナデを行う。焼成は良で、色調は内面乳白色、外面淡茶白色で、胎土には細砂粒を含む。

土師質皿（第22図 1～15）（図版7 1～15）

図示できるものは全体で15点を数え、(1～13)は、一括出土資料であり、他の2点も含めすべてOT-3の出土であった。土師質皿は、口縁径の数値から中皿と大皿に大別することができる。前者は、径 9.2 cm～10.2 cm・器高 1.3 cm～2.1 cm、後者は径 18.9 cm・器高 8.4 cm を測る。中皿には、底部より斜め方向に直線的に立ち上がるもの(2・3・4・7・12・14・15)や、底部より丸味をもち立ち上がるもの(1・5・6・9・10・11)がある。口縁端部は丸く終るもの(1・4・6・7・12・13・14)、尖り気味に終るもの(2・3・9・10・11・15)、平坦面を残し終るもの(5)がある。大皿(8)は、1点のみであるが、底部より丸味をおび斜め方向に立ち上がり、端部は尖り気味に終るものである。



第22図 土師質皿・瓦器・陶器



調整は、大皿、中皿ともに内面および口縁部は指ナデを行い、外面底部は、指頭圧痕を残すものや、弱いナデを行うものがある。胎土は全体に良質の粘土を用い、焼成は良好、色調は暗乳白色である。また、土師質皿の用途については、出土した土師質皿に灯明皿として使用されたと思われる黒色に煤化したものや、灯芯油痕を残すものが見られない為、供膳用に使用されたものと思われる。

瓦器（第22図 16～18）

瓦器は、各トレンチごとに少量の出土を見たが、摩耗した細片が大半をしめた。図示でき得たものは、OT-3で出土した瓦器端片が4点のみであった。（16）は、ゆるやかに内湾し、口縁端部はやや尖り気味に終る。調整は内面を平滑にナデ、外面は口縁部を横方向にナデ、以下は、指頭圧痕などの凹凸面を

残す。胎土は精密で焼成は良好、色調は灰色を呈し、器内は灰白色を呈する。(17・18・19)は、底部のみの残存で、高台は比較的しっかりとした貼付高台で、断面形は逆三角形を呈す。全体にローリングを受けているが、おむね内外面ともナデによる調整で、暗文等は不明である。

擂鉢（第22図 20）

(20)は、口縁部が逆「く」の字に屈曲し、内傾して立ちあがり、口縁部下端にはたれ下りが認められる。調整は内外面共横ナデを行なうが、口縁部外面には2条の橢円線が廻る。また、焼成・色調から見て備前焼と推定される。

ふいご羽口（図版7 17）

OT-3の整地土層で出土している。羽口は、残存部7cm・直径6.7cm・中心孔径2.7cmで先端部は焼けただれていて一部に鉱物の溶解物の付着を認める。

3. B地区概要

調査B地区は、鏡塚古墳の西側地点から太田川の交差点までの東高野街道である。調査は、水道管布設工事に並行して実施した。なお、調査部分は幅2.2m・深さ2mの工事掘削部で総長440mである。

調査の結果、順序は溝底面まで単調な上層の堆積で、上層は砂質土層、下層は粘質土層を主体に構成している。しかし、その中に包含層と認められる土層はなく、遺物も上層の砂質土層で土師器・須恵器・瓦器片などの小破片が若干出土するのみであった。

また、調査区南端の太田川交差点は、過去に遺物出土の報告例があったが、一帯は大きく攪乱を受けていて、調査の対象とはならなかった。

V ま と め

遺 物

出土した遺物は、弥生式土器・土師器・須恵器・土師質土器・屋瓦・瓦器等であった。弥生式土器は、OT-8の整地土層より埴輪片とともに出土している。遺物は、細片で磨耗を受けているものが大半であったが、口縁部等の特徴から、東大阪市の上六万寺遺跡の出土遺物との共通性が認められ、時期的には弥生後期後半に比定されるものである。また、これらの出土状態は、多量の埴輪片の中に含まれていて、周辺に弥生時代後期の遺跡の存在を想わせる資料となつた。一方、OT-8で出土した埴輪は、円筒埴輪・蓋形埴輪・朝顔形埴輪片等で、整地土層中の遺物としては、比較的出土量も多い。また、埴輪の搬出地と考えられる鏡塚古墳については、過去において埴輪の存在が報じられた例がなかった。しかし、今回の調査中、鏡塚古墳の墳丘上に埴輪片が認められ、この埴輪片がOT-8出土埴輪に極めて類似するものであることから、鏡塚古墳に対し新たな知見を加えることができた。これらの埴輪片の調整は、一部に簡略化されたB種ヨコハケがみられるが、ほとんどのものは、内外面に右傾の^①ハケを施している。また凸凹断面はすべて不整形な台形状で突出度も低く、黒斑を有するものが一点もみられない等の特徴を持っている。このことから埴輪の年代を川西氏の提唱する編年に従うとすれば、5期編年のV期前半に位置づけられるものである。

中世遺物は、OT-2・3を中心に出土している。大半が磨耗しているが、図示でき得た瓦器碗は白石氏編年のII-3型式に比定され、OT-2で検出された井戸も、瓦器碗の時期に併行する遺構と考えてよいようである。

遺構

確認した遺構は、OT-1で南北に延びる溝と、OT-2の井戸遺構、およびOT-18の池状遺構等であった。その中でも特に、OT-2で検出した井戸遺構は、この地区における中世集落を考えるうえで重要な資料として注目されるものであった。また、遺構として確認するまでには至らなかったが、OT-11で奈良時代の屋瓦片が出土している。このことは、心合寺山古墳の西側に旧存した心合寺跡と関連を持つもので、今後、当廃寺の寺域を考察するうえで重要な地点と思われる。

一方、OT-8出土の埴輪片が鏡塚古墳のものと認められるところから、古墳時代中期末葉～後期初頭にかけて大竹古墳群を造営してきた氏族内での政治的動向により、鏡塚古墳の墳丘の規模や埴輪の使用等が規制されざるをえなかつたのではないか、とする説に対する再考を求める資料となった。このため從来より指摘されてきた鏡塚古墳の東側上段に位置する畠の畦畔が、古墳の平面形の痕跡を描いていることや、鏡塚古墳の名称そのものから南北に主軸を持つ前方後円墳と考えられるのではないか、とする説もまた考慮する必要が生じた。これらのこととは、水道管布設の本工事の際、前方後円墳と考えられた場合の前方部地点を東西に横断する形で掘削が行われた為、上記の説を論ずるうえでの重要な調査として注目されるものであった。その結果、壁面観察においては、墳丘の基底部に該当する土層を確認することはできず、現段階では、鏡塚古墳を円墳と考えるほうがより妥当であると思われる。しかし、中世時に大規模な整地のあった事実を考慮するとき、前方部が大きく変形した可能性も考えられ、将来的な課題として残しておきたい。

以上のように鏡塚古墳については若干の資料を得ることができたが、当初より期待のもたれていた古墳時代の遺構や古墳築造に関連した遺構等の検出は、まったく皆無に近い状態であった。従って、これらだけからすれば、大竹地区が古墳時代を通じて一氏族の墓域的な役割を果してきた地域であった、とする説に対しては肯定されるところであろうが、調査地区全体が小尾根に囲まれた谷筋であること、また、設定したトレーンチも小規模であったことなどを考慮して

今回の調査で得られた資料だけでこの地区の性格を論ずることの危険は避けたいと思う。

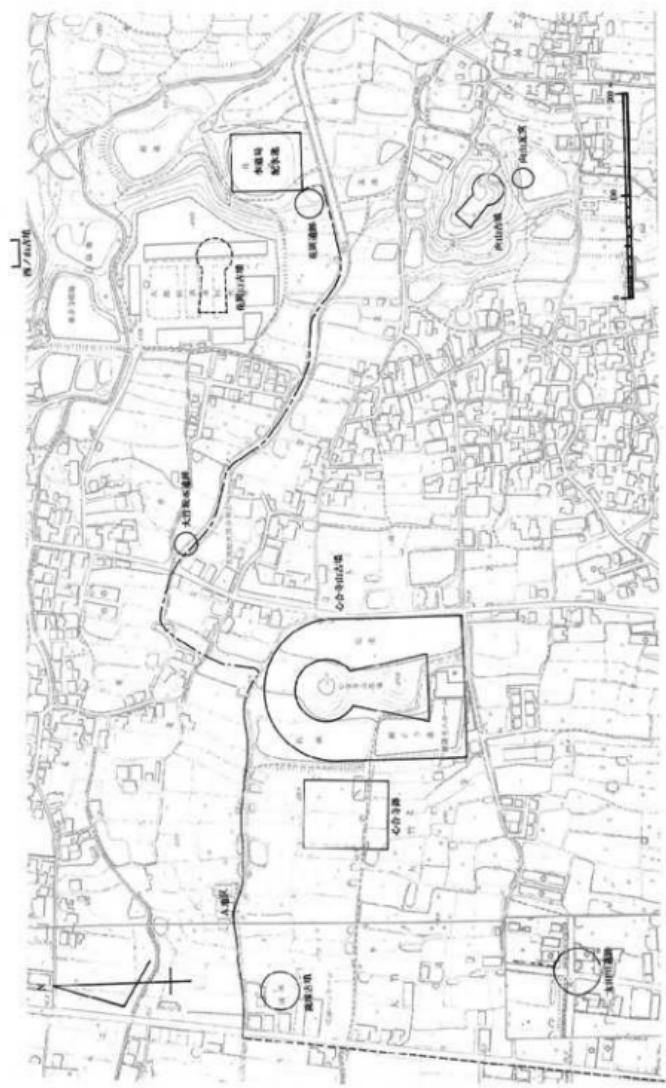
以上のように中世初頭において鏡塚古墳の一部を削平して農耕地を拡げ、「銀治屋筋」の名を残す谷筋に井戸を設けた集落の存在をこの谷の南北の小尾根上に想定することができ、同時に奈良時代前期にはじまる庵心合寺に線を持つ集落が、中世に到って鏡塚古墳の一部を削平した中世集落と係わりを持つものとすれば、「銀治屋筋」の南北尾根は、今後特に注意を要する地域である。

弥生時代後期については、上方の花岡池近くで集落跡の一部を想わせる遺構に伴って多量の遺物の出土があり、また今回の調査でも若干の出土を見た。これら弥生時代と奈良時代以降との生活遺物の豊富さの中にあって、前期の西ノ山古墳にはじまり、後期の愛宕塚古墳に至る古墳時代については、群を構成する程の地域でありながら、生活遺物の出土を見ないことは、同時代におけるこの地域の特質を暗示しているものであるかも知れない。いずれにせよ、大竹地区におけるこれら未解の課題は単に一地域だけのものではなく、広く河内平野中部の古代を考える上で極めて重要な内容を包んでいることを強く感じところである。

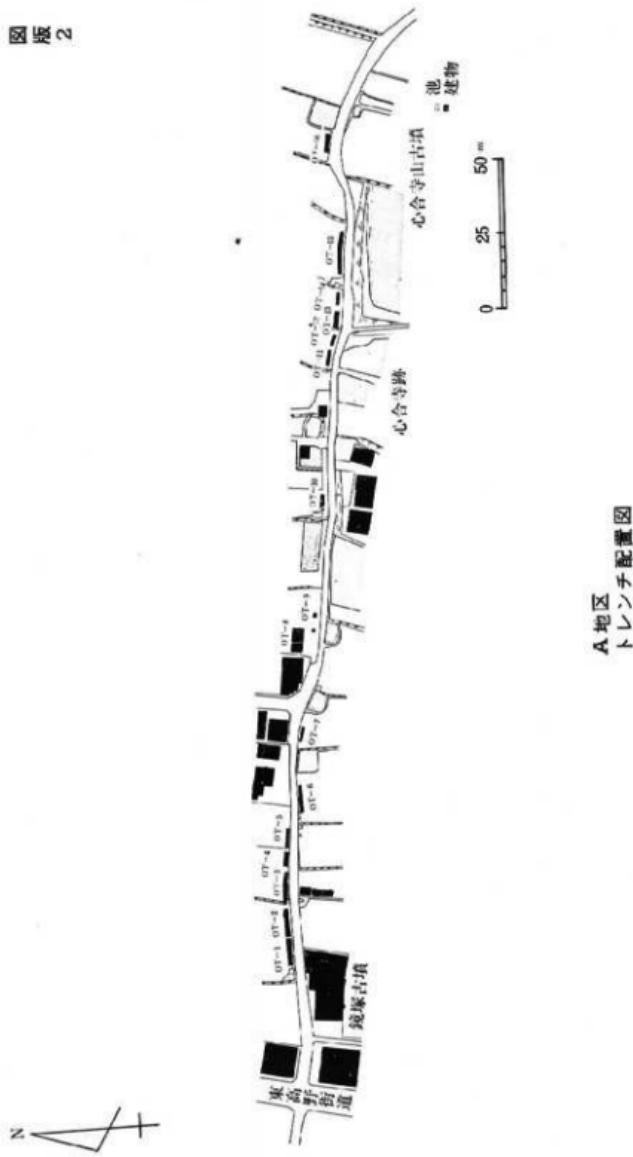
註

- (1) 川西玄幸「円筒埴輪統論」「考古学雑誌』第64巻第2号 1978日本考古学会
- (2) 前掲書(註1)
- (3) 白石太一郎「越智氏居館跡出土の瓦器—瓦器の終末年代に関する—」『古代学研究』第85号 1977年 古代学研究会
- (4) 久貝健「高安地域の首長系譜の動向—一地域からみた古墳時代の展開—」『河内太平寺古墳群』 所収 1979 河内考古刊行会
- (5) 但伝によると上方に銀治屋池と呼ばれる池がある。今回の調査でも銀治関連のふいごが出土している。
- (6) 大竹地区的坂本で弥生時代後期の溝遺構に伴い多量の土器の出土が確認されている。

附圖一



圖版2





○ T-2 トレンチ（東から）



井戸遺構



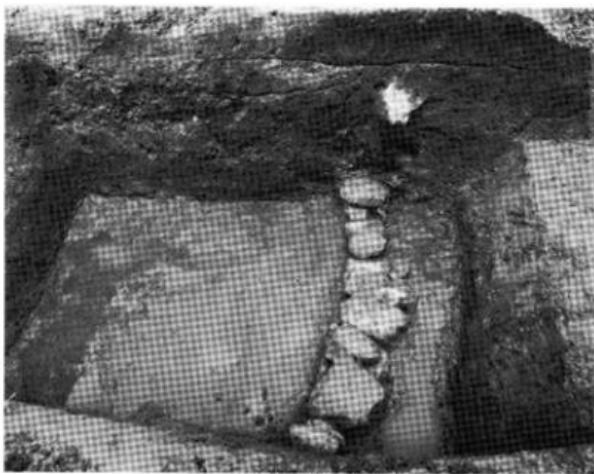
○T-3 トレンチ（東から）



土師質皿出土状況



OT-13 トレンチ（西から）



池状遺構（南から）



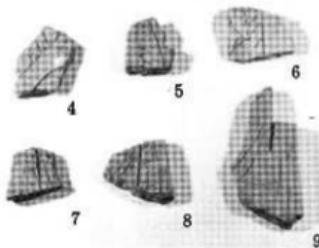
1



8



2



10

